漢詩神奈川

第　19　号

神奈川県漢詩連盟
事務局

川崎市麻生区王禅寺西
2-19-3

TEL−FAX
044-965-4950

発行人　岡崎 満義
編集人　三村 公二

神漢連創立十周年、さらに未来に向けて

神奈川県漢詩連盟会長　岡崎 満義

二〇一六年十月に神奈川漢詩連盟は創立十周年を迎えます。

ふりかえってみると、前会長の中山清さんに「漢詩初心者入門講座」を亡くなるまで数年精力的に続けてもらったことが、神漢連発展の大きな一歩でした。初心者入門講座を修了すると、そのまま漢詩サークルを結成、以後勉強会を続けていくという良き方式の伝統が出来上がりました。漢詩サークルは人材の宝庫、多彩な人材がここから育ってきました。

もう一つは酒井謙太郎さんです。酒井さんは十一月八日に逝去されましたが、神漢連にとって大きなヒントを与えてくれました。

二〇一〇年に岡山県で国民文化祭があり、漢詩大会も開かれました。そのとき、岡山県が生んだ昭和最後の漢詩人といわれた阿藤伯海の漢詩集「大簡詩草」が復刻されました。酒井さんを中核としてこの「大簡詩草」の輪読会が始まりました。詩のむずかしさ、詩の背景がつかめないことなど、この詩集を読み進めるのはなかなかむずかしかったのですが、長老の酒井さんは「円機活法」などの資料を縦横に使いこなして、その果実を皆に分かち与えて、詩を十分に味わうことが出来ました。

この勉強会をきっかけにして、その後、漢詩鑑賞会A、B、C、さらに女性をターゲットにした「霧笛（無敵）女子会」などの活動に発展していきました。

そういう大きなヒントを神漢連に残してもらったと思います。これによって神漢連の活動は大きく広がったと思います。

これまでの十年はこの二つの活動が連盟の基礎工事となってよきものを育ててきたように思います。ほんとうにありがたいことでした。今後この十年をバネにして、さらに未来の十年に向かって、大きなジャンプをしたいと思います。中山清さん、酒井謙太郎さんという、きわだった個性の持ち主が私達の先達として活動してもらったことを本当にありがたいことと思っています。ロールモデルです。この先、どんな新しい活動スタイルをつくることができるか、会員の皆さんのアイディアを期待しております。石川忠久先生に「神奈川の新様式」と折り紙をつけていただいた活動をさらに多様多彩なものにしていきたいものです。私達はアマチュアの漢詩人として「漢詩を学ぶ・漢詩で遊ぶ」ことを目指しています。アマチュアの必要条件は「下手な鉄砲も数撃てば当たる」「枯木も山の賑わい」を信じることだと思っています。上手も下手もこきまぜて、漢詩を楽しんでいきたいものです。

神漢連創設当時の写真：
右より初代中山会長、石川先生、同婦人、窪寺先生、岡崎会長、礒野さん

神漢連会員「全国漢詩大会」で大活躍

平成二十七年度 全日本漢詩大会福岡大会受賞作品

受賞おめでとうございます。

福岡県知事賞

城田六郎

憂空家八百萬戸　空家八百萬戸を憂う
故山鰥寡守家居　故山の鰥寡　家居を守るも
後繼兒孫定有無　後継の児孫定めて有りや無しや
環堵團欒近來少　環堵の団欒　近来少なり
東西南北國將蕪　東西南北　国将に蕪れなんとす

「大意」

故郷の一人暮らしの父や母は、家を守っているが、後継ぎとなる子供達は一体あるのだろうか、ないのだろうか。

狭い家での一家団欒の光景は近ごろめったに見られなくなった。日本中どこへ行っても空家が多く、国全体が蕪れようとしている。

「語釈」鰥寡…　鰥は男やもめ、寡は女やもめ。
環堵…　狭い家

テレビ西日本賞

中島龍一

農村卽事　　農村即事
春社鼓簫鄉里天　春社の鼓簫　郷里の天
誰家檐下暖暄邊　誰が家か　檐下　暖暄の辺
頑童傍母剃頭處　頑童　母に傍いて剃頭の処
惟有餛飩端膝前　惟有り餛飩　端膝の前

「作者の一言」

子供が頭を刈られるのを嫌がる風景を詩にしたものです。

一昔前の幼いころの思い出ですが、この様な過ぎ去りし世の光景は、間もなく誰も顧みることが無くなるでしょう。今日の近代的生活では見られなくなった風景が、他にも多くあります。例えば、銭湯、馬や牛が引く荷車、路上の物売り、縁台将棋、火鉢の前でキセルを吹かす老人、路上で遊ぶ子供の群れ、などなど。これら身の回りの小さなことが、却って興味を引く題材になると思い、詩にしてみました。

転句で「頭」を使用したため、結句で「饅頭」を使えなくて苦労しました。

佳作

瀧川智志

登　樓　　登楼
鄉黌一別五旬年　郷黌　一別　五旬年
俱上雲樓武藏巔　俱に上る雲楼武蔵の巔
遥望峰巒翠烟裏　遥に望む　峰巒　翠烟の裏
不知何處越山天　知らず　何れの処か越山の天

「作者の一言」

郷里の学校を卒業し、同級生に別れて、五十年になります。今日再会し、一緒に雲に聳えるスカイツリーに登りました。遙に、山々が翠烟のうちに望まれます。はてさて、越中の山はどのあたりだろうか？

昨年、同窓会が東京で開催され、旧友と初めてスカイツリーに登りました。眼下に東京の街並み、間近に相州、武州、遥かに、甲州、信州、上野の山並みが臨まれました。さて、故郷越中の山は何処ならんと見えもせぬ山影をしばし追い求めました。年老いてますます故里が懐かしく思われます。作詩を始めて十年、今日あるは、諸先生のご指導の賜物です。厚く御礼申し上げます。

入選作品

香取和之

流　螢　　流螢
孟夏晴宵清爽風　孟夏の晴宵　清爽の風
流螢隱見兩三叢　流螢　隱見す　両三叢
夜光寂寂如燐火　夜光　寂々　燐火の如し
魂魄歸來故里穹　魂魄　帰り來る　故里の穹

「作者の一言」

漢詩を作り始めて四年弱、思いがけずも初めての入選であり、今後の励みになります。かって楚辞の「招魂」篇を読んだとき、繰り返し詠われる「魂兮帰来」（魂よ帰り来たれ）というフレーズに、強く惹かれるものを感じ

たことがあります。そのフレーズに触発されて、子供の頃、故郷で時々見た螢の夜光のことを思い出しつつ、「螢の光はもの寂しげで、燐火（おに火）のようだ。おに火の魂よ、どうぞふるさとの空に帰っておいで。」と詠いました。

入選作品

水城まゆみ

回郷

朝發相州東海湄　朝に発つ　相州　東海の湄
歸郷萬里夕陽時　帰郷万里　夕陽の時
山河草木咸相識　山河草木　咸相識るも
憶妣纏綿風樹悲　妣を憶いて纏綿たり風樹の悲

「作者の一言」

この詩の転句は江戸時代の詩人六如が、子供の頃先師に随って托鉢をしながら行ったことがあるお寺に老年になって再訪した時、昔見て知っていた松や岩が語りかけてくるようだという「峨山別業」という詩の転句「長松巨石咸相識」から引用しました。初め郷里の山と川を檣山紫水（ホバシラ山とムラサキ川）と固有名詞を用いていたのですが、窪寺先生の杜甫の「春望」の「国破山河在・城春草木深」から「山河草木」の方がよいとご批正を頂き、親が死んでしまって孝行できない歎きの事を風樹之歎とか風樹之悲という事も教えて頂きました。先生のご指導のお蔭です。有り難うございました。

福岡大会の受賞者一同
写真提供福岡漢詩連　外波辰雄氏

来年の全日本漢詩大会は近畿漢詩連盟のご協力により「京都」で行われます。

詩題は「寺・社・廟」に関するものです。

全国ふるさと漢詩コンテスト

佐賀県多久市教育委員会主催
選者　石川忠久先生

最優秀賞

摩周湖　池上一利

水色旻天同蔚藍　水色旻天　同に蔚藍
北山深處滿晴嵐　北山深き処　晴嵐満つ
忽聞響震叢林裏　忽　聞く響震　叢林の裏
群鹿下於千古潭　群鹿千古の潭にむかって下る

「選者評」

摩周湖の神秘的な美しい情景を突然破る群鹿の潭に下る轟音の取り合わせが妙。

入選

柳蔭漁舟　川上修己

諏訪湖邊楊柳陂　諏訪の湖辺　楊柳の陂
綠條戲水細鱗隨　緑条水に戯れ細鱗随う
降帆繕網漁翁影　帆を降し網を繕う漁翁の影
一葉扁舟映碧漪　一葉の扁舟　碧漪に映ず

「選者評」

前半は、湖のほとりの柳、その柳の枝が水に垂れ、そこに泳ぐ小魚。後半は、網を繕う翁の姿から、一そうの小舟、碧い水の広がりと、遠近の情景描写がうまい。

入選

瀧川智志

越中越潟　　越中越潟

春風萬里度清漣　　春風萬里　清漣を度り

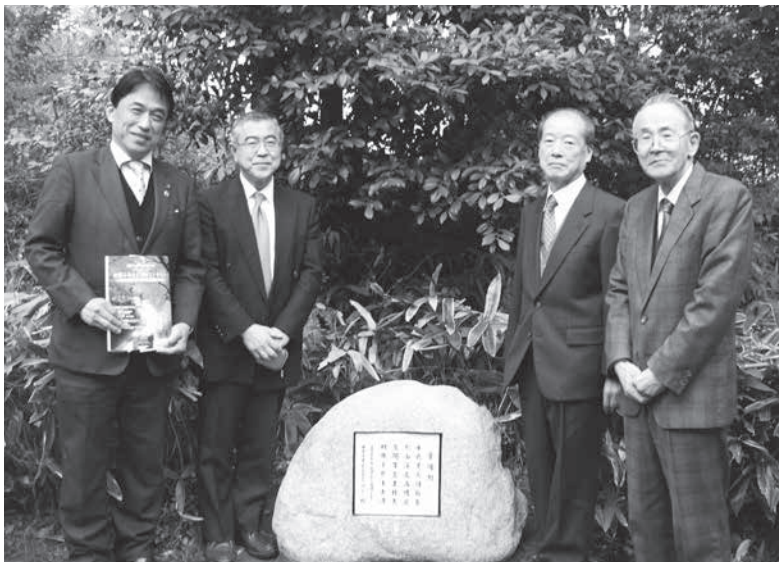
一片浮雲一釣船　　一片の浮雲　一釣船

回首水村花渚上　　首を回せば　水村花渚の上

越山戴雪映蒼天　　越山雪を戴き　蒼天に映ず

「選者評」

風、波、雲と大きな自然に囲まれて小さな釣舟、そこから水辺の村、渚の花と眼を転じ、青空に映える雪の山と結ぶ妙味。



受賞者：右より瀧川、川上、池上の各氏と多久市長

「作者の一言」

春風が清らかな漣の湖面いっぱいに吹き渡り、空には一片の雲が漂い、水上には一隻の釣り船が糸を垂れる。眼を転ずると、水村の水辺の春の花の上に、白雪を戴いた越中の雄大な山並みが蒼い空に聳えている。

越の潟は、故郷の越中富山県の新湊にある淡水湖です。中央には弁天島もあり子供の頃の恰好の遊び場でした。春には釣りをしたり、夏には泳いだり、弁天祭りでは燈火で飾った船や花火を見るのが楽しみでした。特に春のよく晴れた日に、残雪を頂いた雄大な立山連峰を広々とした湖水の上に見るのが毎年の大きな感動でした。記憶に残る子供の頃の心象風景を詠いました。

諸橋轍次博士記念漢詩大会

優秀賞・鈴木虎雄賞

向佐渡島　　中島龍一

平遠稲雲秋色嘉　　佐渡島に向う

江頭城市萬千家　　平遠の稲雲　秋色嘉し

前方海浦才三戸　　江頭の城市　萬千家

一網一舟横白沙　　前方の海浦　才かに三戸

一網一舟　白沙に横たう

秀作賞

太極拳発稽古　　永津憲明

暦新霜暁草堂中　　太極拳発稽古

二十年來不捲翁　　暦新の霜暁　草堂の中

舞態悠容如白鶴　　二十年来　不捲の翁

鶏聲喔喔曙光紅　　舞態　悠容白鶴の如し

鶏声　喔々　曙光紅なり

秀作賞

古寺梅林　　杉森千恵美

梅林瀝瀝百花零　　古寺梅林

廃寺無人門毎扃　　梅林瀝々として百花零ち

老樹知不衰盛事　　廃寺　人無く門毎に扃ざす

枇杷黄熟石苔青　　老樹知るや不や衰盛の事

枇杷　黄熟し石苔青し

神奈川県漢詩連盟創立十周年記念行事

現在、企画・実行チームで検討しています。

●一〇周年記念式典

期　日　平成二十八年十月十九日（水）　午後一時～午後七時
場　所　神奈川近代文学館、中華街中華飯店
実施内容　記念式典、定期総会、講演会、懇親会
詳細のご案内は後日行います。

●横浜中華街漢詩大会・漢詩フェスティバル

期　日　平成二十九年三月
場　所　あーすプラザ（神奈川県立地球市民かながわプラザ）
実施内容　詳細は検討中であり後日ご連絡します。

●神奈川漢詩紀行詩集の発刊

内　容　神奈川県の地域別の詠詩、約一〇〇首を選抜して編集
B5版の詩集、約一三〇頁
発行予定　平成二十八年十月

●神漢連「一〇年の歩み」冊子作成

内　容　神漢連会報二〇号を「創立一〇周年記念号」として発行
発行予定　平成二十八年九月

●漢詩グッズの作成・販売

内　容　現在検討中

●神漢連叢書の編集・発刊

内　容　「七言絶句ここから一歩」第二集発刊　（読み下し文、語釈、通釈付き）

第五回漢詩鑑賞の集い・講演報告

岡崎会長　湘清吟詠会で講演
「江戸のホモ ルーデンス・大田南畝」

湘清吟詠会　会長　三上岳光

平成二十七年十月二十五日午前、横須賀市はまゆう会館において約三十名の弊会会員を対象に神奈川県漢詩連盟会長 岡崎満義先生を講師に迎えて九十分余の講演をしていただいた。今回も昨年同様「古典の日」にちなむ企画。今回の演題は、「江戸のホモ ルーデンス・大田南畝」。第一回「酒とユーモア」、第二回「漢詩―漢詩の中の女考」、第三回「志について　屈原、そして三島由紀夫」および第四回「文士、文壇そして文人」に続く第五弾でした。

新シリーズ　漢詩実作　初級から中級へ

「誰にも解る漢詩作法」

川上天山　著より抜粋

今号より新シリーズを開始します。

今回の「句の構成と詩語」**(十九頁)**に続き、このシリーズは、第二回「韻字および平仄について」、第三回「起承転結の調子」、第四回「漢詩の句調」、第五回「漢詩の読み方」、第六回「推敲の方法と進境の順序」、第七回「詩の題目」、第八回「対句の作法」を予定しています。

鑑賞会C・七絶一歩

毎回盛況に実施

講師の方々の思い

七絶抄開講について　　城田六郎

七絶抄が開講してから六ヶ月がたち、各講師とも二巡したところです。一回の講義で十二首をこなすのに時間が足りないのではないかと当初危惧したが、杞憂にすぎなかった。三月に一度のローテーションとはいえ、その準備には一月以上を要した。あまりなじみのない詩語や典故も多く、その下調べに十分時間を割いた。どうしても分らない項目について、飯沼さんと桜庭さんからご教示にあずかりほっとしたことも何回かある。原則として書き下し文、通釈については三人が目を通しているので、大きな誤まりはないものと考えている。三人寄れば文殊の知恵を実践している次第です。

白居易、蘇軾等唐宋の詩人以外に、金・元・明等の詩が三分の一占めているが、これらの詩人の詩集、選集の類は容易に手に入らないので苦労しています。もしどなたかお持ちであれば、是非利用させて頂きたいと思います。兎角講師の一方的な説明に終わるのを避けるため、どんな些細な事でも結構ですから疑問があればどしどし質問して下さい。また講義の進め方についてのご希望があれば遠慮なくお申出下さい。

私の担当した詩の中で一番好きな詩は、楊万里の「夏夜追涼」です。平易な言葉で奇智に富んだ表現が光っています。是非見習いたいものです。

李白の詩について　　飯沼一之

望廬山五老峰

李白は廬山を愛して五回もここを訪れ、草堂まで建てたそうです。

廬山は、江西省九江の南にある名山、三方を水に囲まれ、東南には五老峰、西北には香炉峯を擁する景勝地です。

十月二十七日に「望廬山五老峰」を読みました。

○○○○○
廬山東南五老峰　廬山の東南　五老峰
○○　○○○
青天削出金芙蓉　青天削り出す　金芙蓉
○○○○○
九江秀色可攬結　九江の秀色　攬結すべし
○○　○○○
吾將此地巣雲松　吾れ将に此の地にて雲松に巣くわんとす

李白は俗流を嫌いました。「望廬山瀑布」という詩では、「永願辞人間」と言っています。雲松に巣くうとは、まさに李白の仙人志向の表現ではないでしょうか。

ところで詩に付けた○は平韻です。起句は平が五字、転句は仄字が六字、承句と結句には平三連。私達の心得る七言絶句の法則からは外れています。しかし、よく目を凝らして見ていると、私は不思議なリズムを感じますが、皆さんはどうお考えでしょうか。

酒仙李白は天衣無縫、勿論酒杯を手に、この詩を吟嘯したことでしょう。

佩文齋詠物詩選を講じて　　桜庭慎吾

今回テキストとして採り上げた「佩文齋詠物詩選―七絶抄」の読み下し文を付した解説書は日本中を探しても何処にもないでしょう。

それだけに白文の詩を始めて読み解くと言う〝知的探求〟が喚起されます。私としては講義の目標を「自力で白文の詩を読み解く力を培う」ことに置いて参り度いと思います。

詩を読み解く爲に用いる辞書として、小生は「新字源」（角川版。他にこれに相当する辞書で可）と諸橋轍次著「大漢和辞典」（大修館版）の二つであり、殆どの用語がこの二つの辞書で検索可能です。「新字源」（および相当辞書）に出てこない用語及び典故に関する説明は「大漢和辞典」に当たってみましょう

「大漢和辞典」は収録されている語彙が多いので、注意深く、当該の語彙の前後もよく読みましょう（辞書は読み物でもあります）。語彙の説明及び引用される詩語や典故は漢文で書いてありますが、これも併せて是非読んで下さい。これが白文の詩の理解に大変役立ちます。

【吟社の活躍】
詩游会・五友会・以文会
鎌倉漢詩会・九詩期会

詩游会　小田原吟行会

詩游会「小田原観月吟行朗詠会」

九月二十七日の十五夜当日に合わせて小田原邸園交流館「清閑亭」（侯爵黒田長成邸）で長成侯漢詩集「櫻谷集」の朗詠、観月の会を小田原市まちづくり応援団と共催で開催した。午後一時箱根板橋に集合、総勢二十名でまず旧山縣有朋亭「古稀庵」を散策、枯淡の小宇宙で松濤、潮騒、啼鳥、岩木、水声、紅葉を存分に味う。

遠来の有朋侯曾孫山縣氏（田原副会長の旧友で神漢連会員）共々元勲の晩年を偲んだ。次に旧武家屋敷の佇まいを残す街路を小田原文学館及び尾崎一雄亭へと歩を進め、広々とした樹陰多い庭園とテラスから石垣山、箱根山の眺望を楽しむことができた。北原白秋、谷崎潤一郎、三好達治、北村透谷、岸田國士、坂口安吾、北条秀司等々旧在住の詩人作家の足跡をゆっくりと辿った。午後四時前小田原城近くの高台、松に囲まれた清閑亭の二階から遥かに湘南の海を臨んで一服、小田原市民十数名の参加者と合流。山縣有朋公爵と黒田長成公爵の漢詩を住田湯島聖堂朗詠会会長、横溝朝翠流宗範（詩游会）の交互の吟詠でじっくりと鑑賞した。暮れゆく海辺の歴史遺産の高殿で朗々たる吟声が時に哀切、時に浸潤して心に刻まれる思いであった。

参加者の漢詩四首

柴田　洋　（漁・虞 通韻）

中秋良夜靜閑居　相集鷗盟欲極娯
澹月何圖密雲裏　須臾明滅是誰徒

香取　和之　（庚韻）

山樓瀟酒一望清　玉兔團團入梠明
吟詠有情憶往事　秋宵酌酒誓鷗盟

森川　誠一郎（東韻）

詠吟滿室起清風　窗外海溟漁火濛
漠漠天陰雲路動　月輪隱顕淡朧朧

新井　治仁　（先韻）

中秋風爽欲宵天　臨海高樓吟詠筵
甦得詩翁故園念　如應玉兎暫醒眠

濃密な時間を堪能後、三村事務局長から神漢連の紹介、小田原市民参加者の飛び入り朗詠で過ごすうち夕闇の海雲から満月が暫し浮かび上がり一同欄干から身を乗り出して、声を上げ嘆賞したものであった。十五夜御膳の会食、座談吟詠合戦で盛り上りの後涼風の中散会した。

（新井　治仁）

「古稀庵」にて参加者一同

五友会　鎌倉で煎茶を味わう

「煎茶と酒と漢詩勉強会」　十二月三日

前々回の会報で紹介しましたように、初心者講座五回生の漢詩サークルの五友会は、通常は偶数月の第一木曜日に石川町駅近くの神奈川労働プラザで午後二時から四時まで田原副会長を講師にお願いして例会を開催しておりますが、会員の中野三琴さんが煎茶のお師匠さんで、年一～二回は北鎌倉の円覚寺裏通りにある中野さんの茶室、「明月庵」に招いていただいて陶淵明、蘇軾、王羲之などを茶話にして煎茶を啜らせていただいた後に、少々の

お酒と昼食、その後別室で例会を開いてきましたことを紹介しました。今回（平成二十七年十二月）は「王維の詩、鹿柴：空山不見人 但聞人語響 返景入深林 復照青苔上、鹿柴（ろくさい）：空山（くうざん）人を見ず　但（ただ）人語の響きを聞くのみ　返景（へんけい）深林に入り　復（ま）た青苔（せいたい）の上を照らす」を茶話にして煎茶を味わわせていただきました。茶室の床の間には中野さんの書かれたこの「鹿柴」の詩の掛け軸と同じく中野さん作の墨絵の掛軸も飾られ、まさに煎茶と漢詩が一体となった場でした。この茶会には五友会会員以外に岡崎満義会長はじめ何名かのゲストも参加されており、今回の茶会には住田笛雄監事ご夫妻と川上修己理事も参加されました。

ところで抹茶は武士が、煎茶は公家が飲むものだそうです。煎茶については夏漱石の「草枕（新潮文庫）、一〇一頁」に、「濃く甘く、湯加減に出た、重い露を、舌の先へ一しずくずつ落として味わって見るのは閑人適意の韻事である。普通の人は茶を飲むものと心得ているが、あれは間違いだ。舌頭へぽたりと載せて、清いものが四方へ散れば咽喉へ下るべき液はほとんどない。只馥郁たる匂いが食道から胃の中へ染み渡るのみであるある。」と書かれています。実際に今回の煎茶も茶碗の中に三、四滴分入っているだけでしたが、それを舌の上に落とすとその妙味が口だけでなく咽喉の方にも広がってきました。将に「結構なお点前でした」という思いでした。

その後は江戸時代の有名な漢詩人「頼山陽」が最も好んだ酒で、酒瓶の箱に頼山陽の作った漢詩が記されている銘酒「劔菱」と昼食をご馳走になりました。酒が入り気分がよくなり、詩心が沸いたところ（？）で、田原健一先生の指導の下で各人の作った詩の叱正会を行いました。

（飯島　敏雄）

中野三琴さんの茶室にて

以文会　三溪園吟行会

平成二十七年七月二十二日

晴天のもと、緑陰の池畔は紅蓮を葉かげに養し、葉は露を染め鮮やかさを保っている。庭園の入り口の風情を過ぎると、由緒ある三重塔が眼前に迫って来る。三溪園の名ガイドさんの案内もさることながら、櫻庭先生のガイドぶりも堂に入ったもので、中々興味深かった。

多々ある文化財のなかでも、鶴翔閣、白雲邸、聽秋閣、茶室などなどの説明を聞くのに精いっぱいなほどの名勝に満足をした。然し何十年とガイドさんの計り知れないご苦労があるとの由。道を極めんとする達人のご努力に敬意を表する。暑さの中の散策は若干強行軍であったが、見聞の糧の多さに、水流の涼風にも癒されて、二時間強を足を曳きひき完遂した。

第二次の勉強会は、会場を蕎麦やの二階に移動して予め用意した資料（櫻庭先生編纂）により、先生の講義を受けた。

三溪の人柄、芸術に対する考え方（幼小時の願望は画家）（横山大観らを養成する）そして公益に対する考え方など。原三溪の漢詩七首の紹介と櫻庭先生の漢詩「三溪園夏景」の紹介。本詩は「三溪園」の漢詩を作詩する時の注意事項も含めた参考として、紹介されるもので、三重塔から蓮の葉に落してゆく意味合いなど。後日以文会例会で作詩する。

第三次の食事会は、勿論〝のどごし〟の食事会となり、爽快感の中に議論百出、笑語脈々として時を貪りながらの吟行会。再見を期して終了した。

（柴田　洋）

鎌倉漢詩会　作品展

「鎌倉漢詩会作品展開催」

鎌倉漢詩会は、礒野衛孝先生ご指導の下、毎月二回(第一・三月曜)鎌倉市内にて、十四名が勉強をして居ります。皆さん大変熱心に討論し、又先生よりご批正頂き新米の私にとっては非常に有意義な場であります。

この度十一月六日～八日の三日間、鎌倉生涯学習センターに於て、会員自身の詠んだ作品展を開催しました。初めての経験で幹事になった方々(小林、鈴木、斉藤、杉森、大森さん)のご尽力で、又鎌倉文化協会の後援も有り、見事な会場となりました。ご高覧頂いた地元の方、又遠方よりも百余名の方々にお運び頂き誠に有難うございました。

自詠自書が望ましいのですが、日も浅く大部分をメンバーの鈴木さん(書家)に条幅仕立にして頂きました。次回からは書も学び自分で書きましょうとの声も聞かれた様です。

今回の展示作品の中で、私の一番感動したものを記したいと思います。それは朝日歌壇で年間優秀作に選ばれた会員の宇津井寛さんの短歌を新聞で見つけ、それを漢詩にされた礒野先生の作品です。

「入念にわが整備せし零戦にて
学友(ともゆ)は征きたり　そして還らず」
宇津井寛

指宿殘照　噫特攻隊見送　礒野衛孝　作
丹心磨翼送飛機　丹心翼を磨き　飛機を送る
年少敢征而不歸　年少敢えて征き　而して帰らず
生死逡巡憶胸裏　生死を逡巡せしや胸裏を憶えば
老殘慙悔涙霏微　老殘慙悔　涙霏微たり
(志村典子)

作品展の会場にて

「九詩期会」発足の報告

世話人代表　山口幸雄

平成二十七年度の漢詩入門講座から九期生の研修会「九詩期会(くしきかい)」が発足しました。会員は二十四名、奇数月の第二木曜日が定例会の開催日です。古田光子先生、大谷明史先生のご指導を受けています。

七月の研修終了後、世話人一同よく勝手がわからないながら、入門講座の熱が冷めないうちにスタートさせたいと考え、諸先輩のご指導のもと、会員への連絡、会場探しなどに奔走し、なんとか九月に第一回を開催することができました。

名前の「九詩期会(くしきかい)」は、知らない者同士が漢詩という「奇しき縁」で出会い、第九期の会として、共に学び共に遊ぶことになったという意味を込めて名付けられました。

会員に行ったアンケートでは、漢詩の基礎知識をもっと学びたいという意見が多かったように、本当に初心者の会ですが、十一月の第二回では、両先生のご協力を得て、二グループに分けての詩稿添削という試みを行い、質疑応答も少しずつ活発になってきました。会員同士の距離も近くなり、どうにか軌道にのってきたようです。これからも試行錯誤を重ねながら、漢詩を共に学び、共に楽しむ会を形づくっていきたいと考えています。九詩期会をどうかよろしくお願いします。

九詩期会の会員の声

漢詩の世界に「片足」突っ込んでみて

原田睦夫

私にとって高校当時、漢詩・漢文なるもの、最も不得意とする授業科目で、以来五十五年、ふたたびこの世界に足を突っ込むとは思いもよらないことでした。

実は、新聞の隅っこ?になにか、神漢連による漢詩への誘い欄があり、それを見て、やってみるかな?ということで半信半疑ながら「平成二十七年度　漢詩初心者入門講座」を受講してみました。

六回にわたる漢詩鑑賞、並びに漢詩作法の基礎、これは七言絶句を基に、押韻・二四不同二六対・禁下三連四字目孤平冒韻・反法粘法などの導入学習でしたが、これがよかった！

講師先生方のこの懇切丁寧なご講義に感銘を受けて、よし引き続きやってみよう！と決めました。この間にも、五月下旬に山手のエリスマン邸での神漢連有志による「自詠自書交流会作品展」を鑑賞する機会も背中をポンでした。

入門講座受講後、神漢連が用意して下さった今後の漢詩習熟のための選択肢（鑑賞会A・B・C）の中で、私は現在、Cの「七絶一歩」の聴講と、特にBの「唐詩選画本」の輪読会に参加させてもらっています。

鑑賞会Bのテキストは、座長である住田笛雄先生が用意して下さっているもので、表題に「唐詩選畫本　七言絶句　續編」とあり、これは江戸の儒学者荻生徂徠の弟子であった服部南郭が「唐詩選」に訓点を付けたものに寛政期に紅翠斎主人という人が自らの作画で画本化したものか。

詩題にまつわる背景画は、山水風景の中の唐風の建物・人物等、以前私は墨彩画をチコッとかじったこともあり、趣があって非常に楽しい。

それと本文の書体表現は、行書体を中心に階書・草書体、それと器用にデフォルメされた篆書体・隷書体も含め、これらは「書写」の勉強にもなりそうな代物です。

さらに楽しいのは、本文の送り仮名や通釈文が一貫して「変体仮名」であること。これらを皆で克明に読み解いていくこと、だから「輪読会」なのだと納得がいきました。今のところ、住田先生をはじめ、鑑賞会の先輩の皆さんが輪読資料を用意して下さっていますが、その資料収集力？の凄さ、敬服の至りです。月に一度ですが毎回の輪読会が楽しみです。

最後に、私は表題のごとく漢詩に「片足」を突っ込んでおりますが、大いに「両足」を突っ込むほど漢詩に入れ込めるかどうか、今のところは「自由」の状態でありたいです。

秋の研修会盛大に開催

研修会報告

中島龍一

秋春の研修会は四十三名が参加され、二回に分けて二十人ずつで熱心に有意義な勉強会でした。

投票による最優秀賞は、十月二十日のグループは八起会の芝公男さん、十月二十八日のグループは詩游会の横溝比呂美さんでした。

岡崎会長より各々のグループ五人の方に賞としてワインを戴きました。

高得点者の漢詩と感想を以下に記します。

第一グループ

借仔猫手　　仔猫の手を借る　　芝　公男

老生厨下獨多忙　老生　厨下（ちゅうか）にて　独り多忙
炊飯烹魚作菜湯　飯を炊（か）ぎ　魚を烹（に）て　菜湯を作る
卓上突然鷄卵滚　卓上　突然　鶏卵滚（ころが）る
猫兒跳躍確乎防　猫児　跳躍し　確乎と防（と）めたり

「作者の一言」

今回、参加者の方々には過分な評価を賜り光栄に思い、また恐縮しております。

八期生として講習を受け、漢詩を作り始めて一年余り、努めて自然を詠むようにしておりますが、時には日常の情景を詠んでみたいと思い、自作の短歌「テーブルをころころころがりゆくたまごハタと止めたり跳び來し子猫」を漢詩に作り替えてみました。短歌では平仮名が使えますので丸い卵が転がってゆく様子を多少なりとも視覚的に表現できるのですが、漢字にすると難しく転句に苦心しました。

詩題を「謝小狸奴」にまた転句の「突然」を「遽看」にしてはとのアドバイスをいただき、勉強になりました。

所属しています八起会では、住田笛雄先生と中島龍一先生より懇切丁寧なご指導をいただき楽しく励んでおります。

また幸いに父の遺してくれた「中国詩人選集」(岩波書店)三十一巻を枕頭に置いて、時々手に取っては秋の夜長を過ごしております。

「作者の一言」

日一日と色付きを増した葉も、澄んだ空に懸かる月も美しい。この時節に今年最後の研修会が催された。提出された二十一作品には、作者の思いの丈が読み込まれていた。がその全ての作品を私は十分に理解する事が出来たであろうか、と今も考える。

漢詩作りを始めて五年。初心の私が常に心掛けていることは『誰が読んでも解ってもらえる詩』と云うことに他ならない。三十代から吟詠の手ほどきを受け三十数年。その間、何百の漢詩を詠み、ふれて来たのであろうか、と拙い漢詩を作りながらふと思う。

そんな私が今回詩題として選んだのが、立秋の前日から三日間催される鎌倉の風物、雪洞祭りだった。ある年、夕闇に川の流れのように続く雪洞の灯りの中を歩いていた。すると、画家小倉遊龜の「半夏生」の絵が私の足を止めた。一本の茎と数枚の葉、その極限まで省かれた絵の余白に心打たれ、忘れることがなかった。その時の思いを詩にまとめてみた。

晴れがましく赤ワインを手に、選句して下さった方々と、忘れられないあの余白に、何時も何かを語りたかった思いが叶えられた気がした。

第二グループ

鎌臺八幡宮文人墨客雪洞祭

横溝比呂美

立秋微動舊都風　鎌台八幡宮文人墨客雪洞祭り（ぼっきゃくぼんぼり）
此夕幽玄畫燭紅　立秋 微かに動かす旧都の風
妙筆炷明神授筆　此の夕べ 幽玄 画燭（くれない） 紅
月登出照綺羅叢　妙筆 明を炷（とも）せば神授の筆（ひつ）
　　月登り照らし出だす 綺羅の叢

東京都・神奈川県漢詩連盟 合同吟行会開催

翁媼童心に還り囿苑に遊ぶ

―東京・神奈川合同吟行会 上野動物園で開催―

昨年九月二十六日、前夜の雨も上がり、東京都・神奈川県漢詩連盟の合同吟行会が上野動物園で開催された。動物園の沿革、園内の飼育動物の現況、蓮池、昆虫類の話などを聞いた後、参加三十名の翁媼が童心の還り、久方ぶりの禽獣との触れ合いを楽しんだ。

その後「上野精養軒」に場所を移して懇親が開催され、恒例の柏梁体の披露があり、いつものように石川先生から講評を頂いた。会食しながら全員から自己紹介と柏梁体の句作りの苦労話などがあり、両漢詩連会員の相互交流が深まり、和気藹々のうちにお開きとなった。

当日の柏梁体と石川先生、窪寺先生の即興玉詩は次の通り。

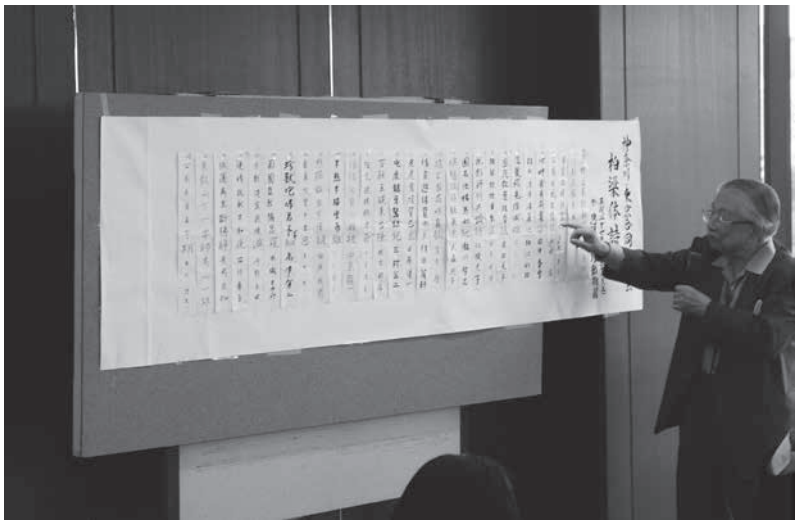
（高津　有二）

石川先生の即興玉詩

江都雨止一天晴　江都　雨止んで　一天晴れ
東叡山頭秋氣清　東叡山頭　秋気　清し
兩所鷗盟風雅起　両所の鷗盟　風雅起こり
猿聲不聽有吟聲　猿声　聴かず　吟声有り

窪寺先生の即興玉詩

猿公囿苑峭巖敧　猿公の囿苑　峭巖　敧ち
忽降忽登逐又隨　忽ち降り忽ち登り逐い又随う
未聽三聲叡山畔　未だ三声を聴かず　叡山の畔
断腸何用戯遊時　断腸　何ぞ用いん　戯遊の時



柏梁体詩巻

雨餘園裏秋動時　浅岡清洲
江都名園金風吹　吉岡昭夫
園裏雨晴詩盟嬉　室橋幸子
公園秋風生桂枝　山田　治
池畔青青荷葉姿　田中香雪
錦水清清満蓮池　細江利昭
浮葉鰥龜獨求雌　池上一利
囿苑散策桂香隨　古田光子
稚児欣欣禽獣宜　飯島敏雄
風雅師朋共論詩　江坂久子
園長流暢馬如馳　瀧川智志
瞑想孤猿観衆追　大森冽子
猿公囿苑峭巖欹　窪寺　啓
猿舎遊縄巖側垂　住田篪軒
老虎嵩垣眥已衰　田原健一
咆虎鋸牙驚幼兒　三村公二
百獣王眠東台陲　秋吉邦雄
往來猩猩興方奇　小室陽子
猖猖向背心難披　中島龍一
半熊半猫雲南離　川上修己
熊猫誕生不須疑　桜庭在洲
象鼻吹雲千里思　柴田　洋
珍獣咆哮君不知　高津有二
園囿猛獣隔窓窺　水城まゆみ
百獣得宜興味滋　河野光世
逐晴親獣不知疲　石川晏子
孤蓬萬里斷腸辭　長岡巨知
東叡山下一字師　高山一雄
公園行楽再可期　石川忠久

以上

平成二十七年度 東京都・神奈川県漢詩連盟 合同吟行会報告

神奈川県　十七名（執行理事、運営委員以外は四名）の合計三十名

実施概要

一、上野動物園吟行

①午前十一時に表門入口に集合、柏梁体の短冊配布、全員の記念撮影

②十一時三十分～午前十二時二十分
上野動物園園長、副園長による講話
上野動物園の沿革、飼育動物の現況、蓮池、昆虫類の話等

③その後園内を散策

二、上野精養軒懇親交流会
午後一時一十分～三時四十分
司会：東京　淺岡副会長

①主催者挨拶
神奈川県　田原副会長
東京都　窪寺会長
乾杯　三村事務局長

②柏梁体の講評
石川先生が提出柏梁体を時系列順に配列（東京都スタイル）され、各句の講評があった。

③会食しながら全員による自己紹介、柏梁体の感想等

④石川先生による李白「早發白帝城」の講話

⑤石川先生、窪寺先生の玉詩披露

漢詩と私

犬飼勇雄

詩吟を歌い始めて八年になります。

吟じる時に一番難しいのが漢詩の持つ詩情を表現する事です。

身体をゆすったり、悲しそうな顔の表現で喜怒哀楽を表せる歌謡曲と違って、直立不動の姿勢のまま、静かな月夜の寒々しさや、戦場のむごさ、収穫祭の喜びなど、どうやって伝えられるでしょう…。

これは自分で漢詩を作り、詩の中に感情を織り込む事を体験する事で分かってくるはずだ。

それしかない、漢詩作りを学び、その中から詩情の表し方を会得していこう！ それが一番の近道のはずだ！ 結果、吟ずる時、私の吟は詩情豊かな吟詠になっているはずだ。

こう考えて漢詩の世界に足を踏み入れたのでした…。が、今から考えますと、なんと浅はかな、分別のない事甚だしい。お前は漢詩をなめているのか！ この恥知らず！ なのでした。

まだ初めて間もないと思っていましたところ、気がついたら漢詩をはじめてから、もう三年が過ぎておりました。

『石の上にも三年、なんでもやり始めたら少なくとも三年は続けなさい』と小さい頃から良く母に言われていました。

三年続けると、その面白さが分かってくるから…というものだと理解していました。

確かに漢詩を始めてからのこの三年間は、無我夢中と言うか支離滅裂と言うか、作っても作っても自分の漢詩に満足できず、落ち込むばかりの日々の連続でした。

当然、詩情豊かな詩吟にもなっておりませんでした。

使う漢字は、今までの人生で触れたことも無いような難しい字を選んでしまうし…。こういう方向でまとめていこうと考えていても、言葉を選んでいる内に、気がついたらまるで違うまとめ方をしてしまっていたり…。平起式で始めた詩が仄起式になってしまっていて、○●の場所が間違っているとご指摘を受けてしまったり…。

ところが三年を過ぎてきた今、誰もが知っている漢字を使いながら、誰にも言いたい気持ちを分かってもらえそうな、そんな漢詩にまとめられているかも…てな気持になり始めている自分がいる様な気がしてきています。

気がしているだけで、出来ているわけではないので誤解の無いようお願いいたします。

が、ひょっとして吟も旨くなり、コンクールで入賞もあるかな？ なんてニヤニヤしたり、取らぬ狸の皮算用だと反省し落ち込んでみたり…。

そんな私の　今　最大の悩みは、語彙があまりにも少ない事です。

過去に漢詩家が使った事のある熟語を使わねばならない。とか、○●の順に従った同意漢字を探さねばならない等のルールにガンジガラメになってしまっていて、数冊の漢詩辞典や電子辞書を広げては見るのですが、先生の添削で出てくるような漢字が、素直に出てこないのです。先生の添削を受けると、どうしてこの字が探せなかったのかと、恥ずかしくなってしまいます。

詩吟として、吟じる時には全然気にしていなかった漢詩作りのルールですが、陰陽で発音している中国人ならともかく、日本人が辞典をパラパラとひも解くだけで、サッと詩が作れてしまうようになれる物なのでしょうか。もうあとどの位やったら見えて来るのでしょうか？。

日本語を話すとき、過去形か未来形かなど文法を気にしなくとも自然に正しく使い分けられていると同じように、いままで陰陽など気に掛けずに使っていた漢字を、漢詩流に克服できる秘訣を早く身に着けたいと思っている今日この頃です。

あと、もう三年頑張ってみるか…。　（終）

会員便り

―学習 遠游 近游 交流 多彩な活動―

「大漢和辞典」諸橋博士の色紙

礒野衞孝

最近、あるご縁により、諸橋博士の直筆の色紙を戴きました（左写真参照、止軒は先生の号）。

この色紙の書かれた年号の壬辰は昭和二十七年であり、先生のお年は七十歳前後のことと思われます。先生は東京師範の他青山学院大学でも教鞭をとっておられ、ここで漢文の授業を受けた学生の中に私の従姉妹がおり、先生から直接に手渡されたものとの事です。最近になって私が漢詩をやっている事を知り、押し入れから探し出してくれました。当時まだ学生だった従姉妹はそんな大博士とは知らず、単に漢文の一老師と思っていたのではなでしょうか。

しかしながらこの一家の長女は書道塾を開いており書に対する見識は十分に持っておりましたので、やはり諸橋博士の威厳さが、これは大切に保存すべきだと思わせたと推測しております。

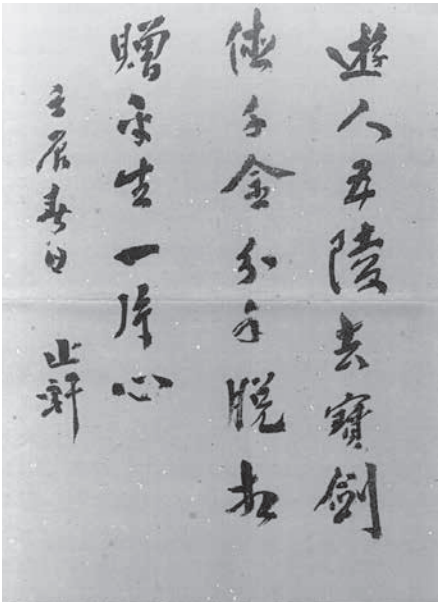
今あらためて博士の伝記を拝見しますと、戦後は全くの英語一辺倒の時代で普通の一学生に色紙を何枚も書いてくださるのは大変なことと思われます。

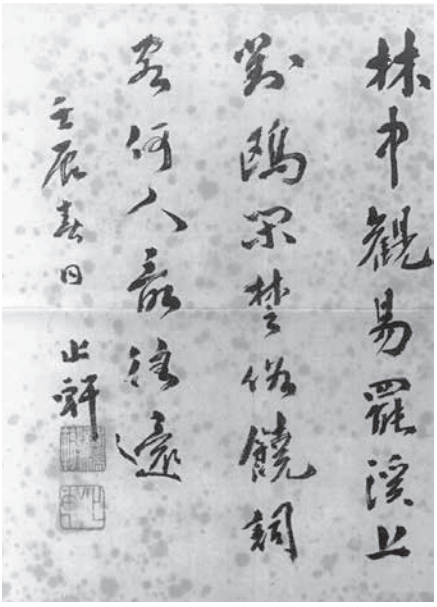
博士には若い者に托す漢字の将来への期待感がお有りであったのではないかと愚考する次第です。

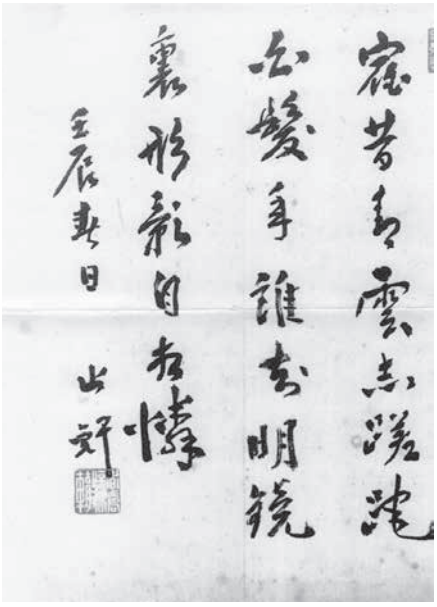
作詩をする身として諸橋大漢和は使わせて頂いておりますので、この事があってから、大辞典第一巻の「序」と巻末の「跋」を読み、又、本棚に仕舞こんだ「漢字漢語談義」を再読させて頂きました。

兼々、大漢和の出版に至る経過は見聞きしておりましたが、今あらためてこの大辞典の出版大事業の尊さを認識し、博士の生涯を掛けた情熱と、戦災で出版設備一切を失った時のお気持ち、更に戦後無から再出発され昭和三十六年に完成を見た長い年月に堪えられた情熱と精魂に感じ入りました。その間に眼疾にも耐えられて多くの方々の助力も又大変な事と推測申しあげます。

この大漢和は正に漢字世界の金字塔でこれ以上の辞典は未曽有であり、又今後も無いかと考えます。これからも大漢和をお使いになられる方々はこの「序」と「跋」をお読みくだされば と思います。漢字は中国から伝来して、







これから平仮名、カタカナが発明され今の日本文化が生れた訳であります。日本がアジア大陸の一部に位置する以上、漢字文化圏の国々との関係は続けて行くべきものと考えますが、旧漢字は、今は主として漢詩の世界と書道で生き残っている、と言っても過言ではありません。

「漢字は亡びず」、併せて「漢詩も亡びず」を信念に作り続けたいと思っております。

追記

この文を書き終わりあらためて、博士の三つの詩を読み返しました。するとこの三つの詩は 何かしら当時の先生の心境そのものの様に思えると感じた次第です。

即ち、自ずから白髪となられて、戦災のこと、大事業の完成の気配が見え、その後に文人墨客との交流を予感され、宝剣ならぬ漢詩を後世の人に托されようとする心境を表わしているように感じました。

照鏡見白髮　鏡に照らして白髪を見る

初唐　張九齢

宿昔青雲志　宿昔（しゅくせき）　青雲の志
蹉跎白髮年　蹉跎（さた）（つまづき）たり　白髪の年
誰知明鏡裏　誰か知らん　明鏡の裏（うち）
形影自相逢　形影（けいえい）　自ら（おのずから）　憐（あわ）れまんとは

大意＝唐の玄宗の宰相であったが安禄山を退けんとして挫切し退官した。鏡に写った白髪を見てやるせない心境をうたった。

答李澣　李澣（友人の名）に答う

中唐　吾応物

林中觀易罷　林中　易を観（み）ることを罷（や）め
溪上對鷗閑　溪上　鷗に対して閑（かん）なり
楚俗饒詞客　楚俗（そぞく）（楚の国）詞客　饒（おお）く（多く）
何人最往還　何人か　最も往還す

大意＝蘇州で仁政を行った長官であるが、退官後の心境を友人に答えた詩。易書は読まず鴎の如く自由に詩人達と交遊したいと言う。

送朱大入秦　朱大（人名）の秦に入るを送る

盛唐　孟浩然

遊人五陵去　遊人五陵（長安の地名）に去り
寶劍値千金　宝剣　値千金
分手脱相贈　手を分（わか）つときを　脱（だつ）して相　贈る
平生一片心　平生　一片の心

大意＝孟浩然が友人を長安へ見送るに際し宝剣を送り別離を惜しんだ作。

漢詩鑑賞会Bに参加して

浜辺又八

江戸時代の人達と同じ教本で、勉強するという何かしら不思議な親近感が湧き、入会させて頂きました。しかし、会に対し何の貢献もせず、いつの間にか一年半も経っていたことに驚きと、熱心に講義をしていただく先生方や諸先輩方に多少後ろめたさを感じておりました。そんな態度を見透かされてか、当会へ参加しての感想なり、唐詩選への想いがあったら書いて欲しい旨の依頼がありました。

江戸時代の庶民向けに発刊された、**唐詩選画本**を教材にして鑑賞するものです。その漢詩の説明が**画**と**ひらがな（一部漢字）の筆文字**で書かれております。**いろはにほへと**の**筆文字表**を頂きました。痩せ干からびたわたしの脳みそは、**あいうえお**順にしっかりと固定されておりましたので、**いろは文字**を探すだけでも大変でした。そんな訳でひらがなを読み込むのが難敵でした。（後で、ひらがな説明文の参考書があることを知りました。）

教材詩の中で、**皇甫冉**の**曽山送別**の詩が小生の若き日、人生に惑い放浪したときのことを甦らせてくれたりもしました。これからは、いつまでも傍観者のままではなく、一詩を担当し冷や汗をかきつつも、説明をする側に立てればと考えております。

（終）

碑文解読の「苦しみ」と「楽しみ」

松本征儀

編集子からの依頼は、初心者には荷が重い。でも、何かの参考になるかもと、受けることにした。

碑文解読は、一般に「拓本」が基本だろう。事前に関係者の了解を取り、現物や周囲に細心の注意を払い作業する。写真だけでは、刻字を覆う苔や塵は撮れても、肝心の刻字が読み難いことがある。筆者の場合、素人で残念乍ら拓本の知識や腕がなく、現地で現物を写し取った。予想以上に辛い仕事であった。台湾で、真夏に基壇に上り、長時間作業した折は、倒れそうになったこともある。

重忠の碑文は、明治廿五年の建碑で、当然旧漢字が切れ目なく続く、句読点など無い所謂「白文」である。文章は著名な儒者、漢学者に依るもので、嘗ての旧藩校、昌平黌出身者、関係者が多い。

一般に、碑文に使われる字体は、楷書が主流だが、隷書、篆書もあり、凝ったものもある。漢字も、正字、異体字、俗字、古字等、常用漢字では見かけない文字が、当然のように混在して現れ、同意の文字を、意図的に字体を変えて使うこともある。更に、普段全く見かけない漢字も、平然と唐突に現れる例もあり、それらを前に辞典を眺めては、呆然と徒に時が経過することもある。

傍らに立つ人物は建碑にかかわった一人と思われる。
（写真は特別展「畠山重忠」76頁より転載）

都筑郡二俣川村万騎ノ原畠山重忠ノ碑其十一

解読には、文字の他に、主題の歴史的背景や、語句に現れる典故の知識が必須であるが、殊に後者は、知らないと文の表面上の理解はできても、深い意味は分からない。これらの諸点は付け焼刃は効かず、漢学の素養が格段に低い者には、一番厄介で苦しみと言うべきかも知れない。問題点ばかり取上げたようだが、碑文の構成には凡その流れがあり、慣れると語句や文の意味の切れ目が、次第に分かってくる。霧のようだった文章が、熱誠溢れる先人達の熱い思いや、果断な実行力、世界観など、現代に訴えるものが多く、取上げられた人物の活動年齢が、平均して現在より遥かに若年で、教えられることが多い。これは大きな喜びである。碑文解読には、かかる時間を除けば、プラスはあれどマイナスは少ないと言えようか。

石碑は横浜市旭区万騎が原三十九（最寄駅は相鉄線二俣川）にある。「畠山重忠烈碑」（建碑明治二十五年十月）のことでありこれを解読した。碑文の概略を以下に記す。

畠山重忠は、平安末期～鎌倉初期の武将、元は平氏の出、後に頼朝に臣従して治承・寿永の乱で活躍。知勇兼備の武将として常に先陣を務め、幕府創業の功臣として重きをなした。武勇の誉れ高く、清廉潔白な人柄で、坂東武者の鑑と称されたが、頼朝没後、北条時政の謀略により、謀反の疑いをかけられ、現在の旭区鶴ヶ峰で大軍に囲まれ、討ち死にした。地元に、遺蹟が多い。「…かくて、非業の死を遂げた畠山重忠の霊魂を憐れんで、明治期に入り、鶴ヶ峰村在住の有志が話し合い、遺烈碑を建立し、未来の後進に、その歴史的意義を伝えんとしたもの」である。（終）

漢詩随想

山縣知彦

初めて漢詩に接したのはいつのことだったろうか。わが家は一九四五（昭和二〇）年三月九日夜の東京大空襲で、麹町（現千代田）区の自宅が丸焼けとなり、子供の頃の記録は何一つ残っていないが、その三年前の修学旅行で吉野にも行き、藤井竹外先生の「眉雪の老僧」云々の詩の説明を聞いた覚えがある。あるいは、小学唱歌に載っていた「天勾践を空しうする勿れ、時に范蠡無きにしも非ず」の方が先だったか。

いずれにせよ戦争中までは漢字や漢語に出会う機会は今よりははるかに多かった。近頃

は当用漢字、常用漢字、そして本場の中国ですら簡略字体が横行する世の中となったが、戦争前の状況を知る者にとっては誠に歎かわしい。と一人でフンガイしてみても大勢には抗し難いが、私は生まれつき片目片耳の身なので音楽は全くダメ、眼も立体感覚は全くないのでスポーツも苦手である。他にすることもないので、本ばかり読んでいた。読書は眼が疲れるが、今でもどうにか読むことは出来るので感謝している。

父は、兄も私もひよわで、激しい受験競争には到底耐えられまいと見抜いて、旧制高校まで続いて行ける学習院に入れてくれた。当時の学習院は皇族・華族の子弟のための学校で、平民の子は定員に空きがあれば入れて遣わす、という姿勢であった。父は学習院のOBなので、幸い二人ともどうにか入れてもらえた。

四年生の時、私は、指揮者・作曲家として著名なK子爵の令息と親しくなった。彼の父君は私の父と同級だったので、文字通り親友となった。Kは後に父君と同じ道を歩んだが、何故音楽の嫌いな私と仲良くなったかというと、彼は大変な読書家であった。中学一年の時には、これまで誰も借りたことのない漢籍を借り出したと、司書の人が感心していた。彼の本の読み方は、私のように一頁から読み進むのではなく、パラパラと拾い読みをして興味のある所に当たると詳しく読み、直感的に本質を把む、というやり方であった。エジプトのヒエログラフを解読したシャンポリオンのことも、有名な南方熊楠のことも、彼に教えてもらった。彼は正に文化先進国であり、私はすっかり魅了されて彼に夢中になった。彼に教えられた本を読んでいると、宿題が出ていることを覚えていても、翌日は平気で「忘れました」と答える。先生は「烏が鳴かない日があってもお前が宿題を忘れない日はない」とカンカンに怒る。かくて一学期の成績は大幅に低下し、母親は担任に「兎も角クセのあるお子さんだから、あまりつき会わないように」と注意される始末。

生まれつきの傾向なのか、彼の強い個性の感化なのか、私はいろいろのことに興味をもつようになった。たいした才能はないので、どれも「好きこそものの…」ではなく、すべて「下手な横好き」の方である。大学受験にあたってもいろいろと迷ったが、かつての天文少年の名残りで、理科一類を選んだ。数学者を目指したのだが、全国の秀才と接して全く自信を失い、専門課程は英文学を選んだ。ここはかなり性にあったがシャイな性格なので人前でしゃべることは苦手で、結局教職科目は敬遠して取らなかった。

あげくの果ては、経済学部に学士入学して金融機関に就職する破目となった。蛙の子はやはり蛙となったわけである。学士入学した時、友人に「お前のは不経済学部だ」とからかわれた。授業料を二年分余計に払うという意味だと思っていたが、実際にはもっと損害は大きかった。年を取って入社しても定年は同じだから、年金の納付年数は人より短い。加えて、「金融機関の仕事に全身全霊を捧げるほど單純な男ではありません」などとイキがっていたので、勤務成績は好ましくなく、年金額は更に少なくなった。

しかし、別の意味では大いにメリットはあった。田原健一さんとは入社年度はあまり、違わず、ある時期は課は違うが同じ部に所属していたこともあって、神漢連入会のお誘いを受け、入れて頂いた。最初のうちは、研修にも参加し、總会にも出席したが、近年は会報に目を通すだけの会員になっている。そこへ、田原さんから「九月の会合では山縣家ゆかりの古稀庵もコースに入っていることだし、久しぶりに参加しないか」とのお誘いを受け、喜んで参加させて頂いた。この会では住田先生が曽祖父の漢詩を二首朗誦してくださり、私にとって誠に意義深い会合となった。

このところ、漢詩を作る方はすっかりご無沙汰してしまったが、好い刺激を頂いて創作意欲が湧いてきた。たまたま石川忠久先生のご新著が出版されたこともあり、ルールを学び直して、辞世の詩を詠むことを新しい年の目標としたい。なお、私は新宿御苑のお隣に住んでいるので「苑外」と号していたが、新たに曽祖父の号「含雪」にヒントを得て、号に「含氷」も加えたいと考えている。「一片の氷心」もこの号のヒントの一つとなった。今後とも帰り新參の怠け者に皆様の温かいご指導をお願いしたい。

（終）

■訃報　酒井謙太郎氏

神奈川県漢詩連盟の会員　酒井謙太郎氏は、十一月八日逝去されました(享年九十二歳)。

ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

酒井謙太郎氏逝去の事　田原健一

薄ら寒い晩秋の午後、酒井さんの息子さんより電話あり、謙太郎氏が十一月八日に逝去とのこと、病名は悪性脳腫瘍、享年九十二歳。来るべきものが来たと首うな垂れて受け入れた。

葬式も本人のご意思で内々に済ませた由、線香を上げる機会が欲しいと申し上げた。ご好意で漢詩仲間だけでのお別れ会をご子息夫妻にご自宅で開いていただいた。

ありし日の酒井謙太郎さん

三村さんに連絡をお願いし、岡崎会長始め十八人が集った。窪寺先生は悼詩をお持ちになった。石川先生は所用で悼詩を幸便に託された。両先生の詩が仏前に並んだ。とりもなおさずそれは、酒井さんの人格や才能がいかに皆さんに敬愛されていたかの証左でもある。

両先生の詩を住田さん三上さんが例によって例の如く朗朗と吟じてくれた。同席の息子さんからは身内ならではの酒井さんの暮らしぶりの話や、皆さん夫々の酒井さんとの係わりでの思い出話で席は盛り上がった。良い会になったねと連れと話しながら家路についた。

酒井さんは皆から尊敬されていた。八十過ぎてから本格的に取り組まれたその詩は、雅にあふれて沖淡纖穠、誰もがその才能を認める稀有の人であった。窪寺教室や連盟の人たちとの交流が楽しそうであった。大簡会という漢詩の勉強会を主宰として指導して頂いた。解釈に困ると、皆、酒井さんに顔を向けた。

〝漢詩作りも勿論だけど、九十過ぎてのこの年で新しい知己を得た事、若い皆さんと自由闊達な話が出来ることが、何にもまして楽しく嬉しい〟と本心を語られていたことを思い出す。病に伏せて僅かに五ヶ月、あっけなく冥土に旅立たれた。命の儚さをおもう。残念である。

酒井さんが自分の詩集の中で最も好きと言っていた詩を紹介する。

憶青春　酒井謙太郎

浩歌傲世望青雲　浩歌　世に傲りて　雲を望み
酣醉多情依絳裙　酣醉　情多くして絳裙に依る
不慮年移嘆黃耇　慮わざりき年移りて黃耇を嘆き
寒窓吟句對紅曛　寒窓に句を吟じて紅曛に対せんとは

石川窪寺両先生の悼む詩

敬悼酒井素庵叟　石川忠久

壯年實業著先鞭　壯年　實業　先鞭を著け
九十三齡勝事全　九十三齡　勝事全し
眞鶴岸頭詩會後　眞鶴の岸頭　詩会の後
仁人乘鶴去何邊　仁人　鶴に乘り　何辺にか去る

哭酒井素庵翁　窪寺貫道

烈日和風九十年　烈日　和風　九十年
縱兵將業弄吟箋　兵を縱いままにし　業を將き吟箋を弄す
愛聞頃者病魔冒　愛み聞く頃者　病魔に冒さると
龕下悲哉奠一篇　龕下　悲しき哉　一篇を奠す

■訃報　山田和雄氏

神奈川県漢詩連盟の会員　山田和雄氏は、十月二十日逝去されました(享年八十三歳)。

ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

新シリーズ

漢詩実作　初級から中級へ　その一

「誰にも解る漢詩作法」

川上天山　著より抜粋

川上修己

句の構成と詩語

　五言の句は二字と三字とより成り、七言の句は二二三の語より成れることは已に前述の通りであるからして、句を構えることは必ずこの二三の切れ、又は二二三の切れに従いて、それに適する語を使用するのが肝要である。故に初学の士は、句の習作に当たって二字二字三字と語を積み重ねるようにすると都合がよい。たとえば春の景色の晴れやかの所を句にしようとすれば、花開、鳥鳴、春晴、などの字が思い出される。そこで花開鳥鳴と重ねれば上四字ができる。下三字は春晴二字の上に見とか弄とか楽とか自分の心持に従った働きの字を付ければ一句が出来る。だが鳴字は平でここは仄の場所だから仄の叫の字を用いるか、叫では春日にふさわしからぬから鳥鳴としておいて上の花開を花發とし、鳥鳴の下にすれば鳥鳴花發となる。そこでこれが自分の心持を主とするものならば見春晴となし、景色の描写ならば、弄とか楽とかとする。そこで此句は鳥鳴花發見(弄　楽)春晴となり、起句や承句などには格好のものとなる。

句の上半と下三字の構え方

　斯うして考えれば白水に青山を配するとか、白露に金風を組み合わすとか、其他落花に啼鳥とか、白雲に流水とかという風にして上四字は容易に考え出される。下三字は大体上四字を説明する字にするか、更にそれを強調する字かを用いるのが普通の行き方である。即ち白露金風とすれば早報秋とする。白水青山とすれば一望中とするとか、綿密に自分の心持を考えつつ進めば決して見当に迷う事はない。

　所で斯うして二字三字の語を重ねるには、又それによりて自己の意中に適切なる句を作らん為には、内容の豊かの、意味の精確な、そして雅味の多き語を選ばねばならぬ。即ちなるべく多数の詩語をだんだんに用意する必要がある。

　詩語といっても何も特別のものがあるのではまいが、初学の間にはこれに馴れる為に無用の思い過ごしをしたり、また思い違いをして不熟のむづかしい字を捜したり、反対に俗語を用いたりする事がよくある。俗語も困るがむづかしい字も必要なく、唯日常使用の文字の間に於いて二字の語、三字の語をそれぞれ心に留めて其意味を充分咀嚼(そしゃく)しておけばよいのである。

二字と三字の構え方

　詩語とは普通にいう漢語のことで、せめてもというを猶可と、つくづくというのを眞成という類である。又一様に梅をいうのも其時々の有様で早梅、野梅、臘梅、寒梅など使い分ける。人間の事でもその風格により大人、小人等の区別から、高人、鄙人、哲人、細人、野人、幽人等いくらも使い分けがある。又三字の語にしても形容字と動字とを合わすれば随分自由に操れる。即ち山というても二字ならば春山、暮山、雪山、雲山等使用され、三字とすれば雪滿山とも花蔽山とも、力抜山とも雲在山とも出来る。其他故郷山、夕陽山、湖上山等の使用は韻字を兼ねて下三字に当て箝める。歸の字は二字では客歸、鳥歸、忘歸等もあり、三字とすれば伴月歸、看花歸等ともなる。

(以下次号)　以上

二十八年度前半・後半のスケジュール
カレンダーに記入しましょう

●サークル交流会（バトル漢詩甲子園）
本年は秋の神漢連十周年行事に向けての準備多忙につき開催は見送ります。

●定期理事会
日時　平成二十八年二月五日（金）　一二時三〇分より
場所　横浜国際ホテル　横浜西口徒歩五分　電話045・311・1311
議題　平成二十七年度事業報告／平成二十八年度活動計画／創立十周年記念行事
役員人事の件／その他

●新人研修会　四月十三日（水）／二十七（水）／五月十一日（水）／二十五日（水）
六月十五日（水）／七月十三（水）　全六回

●吟行会　横浜港遊覧・五月中旬（十日または十二日）

●研修会　八月十九日（金）・二十五日（木）・三十一日（水）予定

●神漢連　総会
一〇周年記念式典を兼ねます。
期　日　平成二十八年十月十九日（水）　午後一時～午後五時
場　所　神奈川県立近代文学館
実施内容　記念式典、定期総会、講演会、懇親会（中華街中華飯店）
詳細のご案内は後日行います。
議　題　平成二十七年度事業報告／平成二十八年度活動計画
役員人事の件／その他
講演会　演題「未定」／懇親会
詳細は後日連絡します。

★漢詩フェスティバル
平成二十九年三月開催（詳細は検討中）
場　所　アースプラザ（神奈川県立地球市民かながわプラザ）

編集後記

今年は神漢連発足十周年の節目の年となり、多くの記念行事が企画されている。関係各位の力添えに期待する一年になることは疑いない。ご協力をお願いしたい。また四月から実施される初心者入門講座（新人研修会）も十回目となり会員の増加に寄与することとなることでしょう。

昨年は本連盟より「全国漢詩大会・福岡大会」および「全国ふるさと漢詩コンテスト」などに多くの入選者が輩出し、喜ばしい成果となった。今年も多数の会員の応募を期待したい。

ところで、本号より新シリーズ「漢詩実作・初級から中級へ」を八回シリーズで掲載することになりました。原本は昭和十年に初版が発刊され昭和十七年十月までに七刷りまで発行されている（この本は古書店でも入手困難であるが札幌の古書店にあるようだ）。古い本ではあるが内容は決して古くはない。著者については次号で紹介する予定である。これが漢詩実作の方々に役立てれば幸甚である。

次号は左記のように予定されている。

（香取、川上）

次号の二十号は十周年記念特別号として平成二十八年十月一日の発行を予定しています。